

新潟・馬場屋敷遺跡

ばばやしき

新潟・馬場屋敷遺跡

ばばやしき

の意味の中洲とも考えられる。現地表の標高は三・五mである。

1 所在地 新潟県白根市大字庄瀬字馬場屋敷

2 調査期間 一九八三年(昭58)一〇月~一一月

3 発掘機関 白根市教育委員会

4 調査担当者 川上貞雄

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 一三世紀~一六世紀

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

馬場屋敷遺跡は、大河川の自然堤防上に當まれたと考えられる集落跡で、東西100m、南北80mの広がりがあり、行政区画に

より興野遺跡、若宮様遺跡、

馬場屋敷遺跡の三つに区分

されているが、もとより同

一遺跡と考えられるもので

ある。この地域は越後平野

のほぼ真中に当り、日本最

長の大河である信濃川と、

その分流である中ノ口川と

に挟まれた低湿地で、広義

判明したが、南の馬場屋敷遺跡には、さらに下層遺跡があり、その一部分を調査し、建物跡一棟、祭祀遺構四を見出した。木簡の多くは、建物跡前庭部とそれをとりまく溝周辺より出土し、呪札の一部は祭祀遺構内より出土した。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「[古カ]川のうらのゝかや
かるへし□
〔穿孔〕」

・「しやうをう四年
正月十一日
〔穿孔〕 (花押) (焼印)」

111×67×3

(2) 「古川ハのかやのふた」
〔穿孔〕

・「〔花押〕 (焼印)」

135×(37)×4

(3) 「▽□□□かや」
〔焼印〕

110×(30)×3.5



147

147

147

- (4) 「ふ」い川者のかや
ふた
○(穿孔) 122×55×5

(5) 「よ」しくのかやのふた
正應六年正月日
○(穿孔) 100×45×4

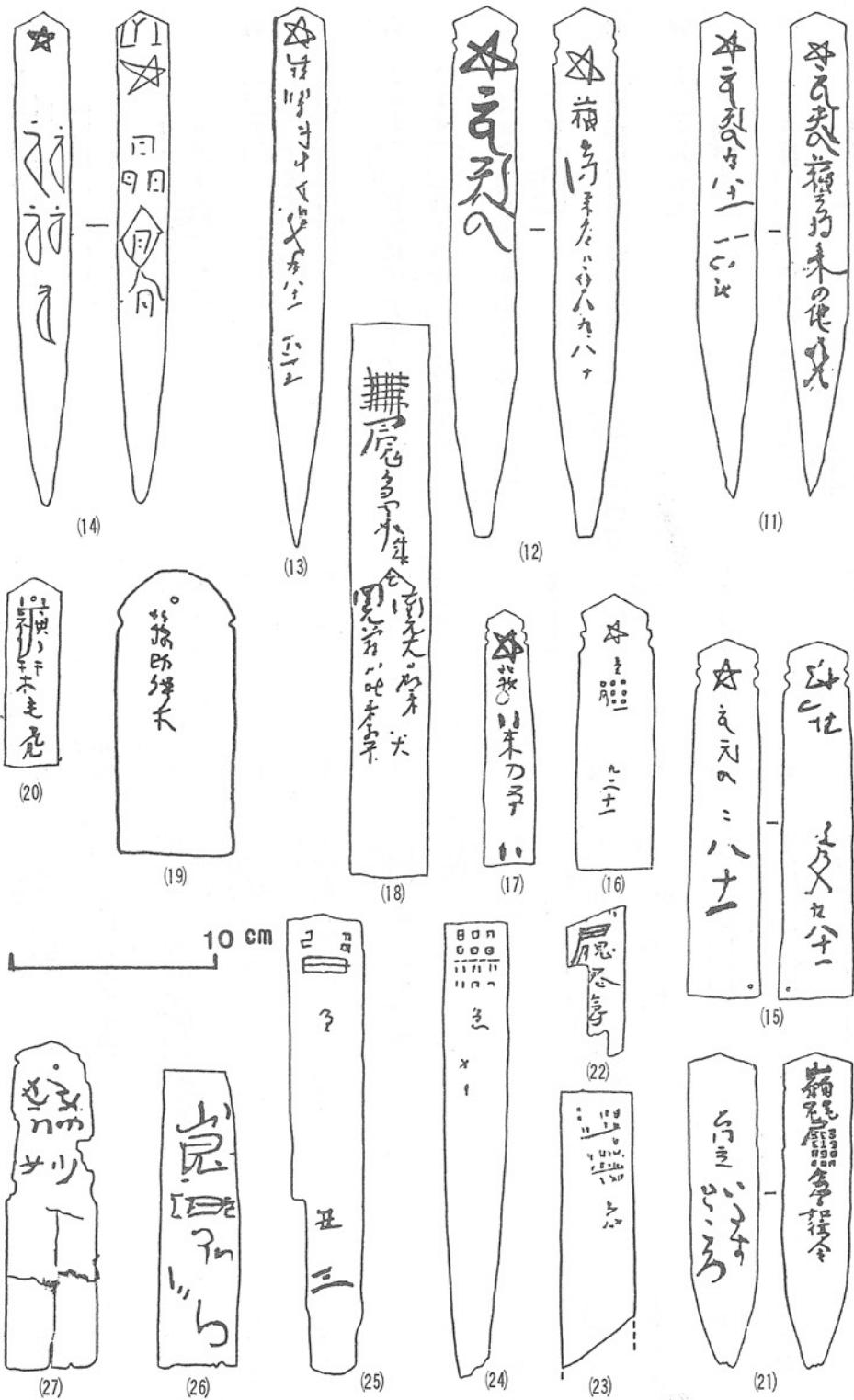
(6) 「」
〔たか〕
正應六年
○(穿孔) 87×45×4

(7) 「」
〔カ〕
正應六年
○(穿孔) 122×47×4

(8) 「」
〔八カ〕
かわ〔八カ〕十もな〔八カ〕
一〔まか〕む〔まか〕(花押カ)
ふ子満きの事
かわ〔八カ〕十もな〔八カ〕
一〔まか〕む〔まか〕(花押カ)
「」
〔んか〕
「」
〔んか〕
一月九ぬか
一月九ぬか
113×50×6



- (9) 「                                            <img alt="Square seal impression" data-bbox="



出土した木簡、及び墨痕を消失したが形態的に類似する資料は合計一〇九点を数えた。未整理のものもあるが、いくつかに分類することが出来る。

第一類(1)～(7)、それぞれ紀年銘・花押・焼印が施され、「かや」

「かやのふた」等の主意が読める。これらは山札と考えられるもので、茅札即ち茅刈りの鑑札・許可証と考えられるものである。「古川」「よしへ」は地名と考えられ、近くに古川があり、吉江館がある。「ふた」は札であろう。

第二類(8)～(10)、裏面の年号以外は墨痕が明瞭にもかかわらず判読出来ないものである。これらの内の一部は付札と考えられる。

第三類(11)～(20)、形態的には数種にわかれが総てに呪句が記されている。このうち(11)～(20)は蘇民将来呪札であり、疫病除として祭られたものであり、その他は前者の呪句や符形を見ないが、いずれも同様な災厄けの呪札であろう。蘇民将来札の蘇の文字は必ず禾と魚を左右逆に記すのを常とする。ここに多く見られる☆||五形や△×||六星(六鬼)は蘇民将来の呪図であろう。同じく「」はバン・ア・イの三字か、バン・アークの二文字か明確に出来ないが蘇民将来を表わす種子と推測されよう。(14)～(16)・(21)・(23)・(24)・(25)に見られる日・月・口の集合は星符等にしばしば見られるもので呪句と考えられ、戸・戸は文字通り戸でありその中に厄鬼を閉めたものであろう。

(18)の図は本来四縦五横で表現され九字であるが、ここでは書き誤り

であるのか、あるいは俗信で十字であつたのであらうか不明である。急々如律令は漢代の公文書の用語であるが、符呪者の呪言となつたし、九々八十一等は、九宮八十一神の表現で最大の願文がこめられたものであろう。

尚(2)は分類出来ないものであるがここに図示した。この他断片的なものもあるが省略した。

9 関係文献

白根市教育委員会『馬場屋敷遺跡等発掘調査報告書』(一九八三年)
川上貞雄「馬場屋敷遺跡出土の中世木簡と呪術資料」(『日本歴史』四四一号 一九八五年)

(川上貞雄)